

若年者（生活困窮・就労困難層）の
地域循環型居場所・就労支援事業
活動実績報告書

令和4年度

子ども第三の居場所

循環型未来食堂

みんなの食堂

特定非営利活動法人 芹川の河童

ごあいさつ

NPO法人芹川の河童 理事長
上田 健一郎

新型コロナウイルスの発生から3年が経過し、政府は、新型コロナウイルスの感染法上の分類を5月8日から、季節性インフルエンザと同じ「5類」に引き下げると決めました。ようやく収束に向かいアフターコロナが見えるところまで来ました。

POSTコロナ時代の社会の模索が求められる中、人口減少少子高齢化に加え、円安、不安定な国際情勢、原材料高やエネルギー費の増大、人手不足など問題が山積しています。

さらには、全ての活動の基礎である地球環境を脅かす気候変動への対応として、脱炭素は、どの地域、分野に拘わらず、避けて通ることができない問題で、社会のあらゆる面で「持続可能性」が問われる時代となりました。

このようななか、家族や家庭が抱える問題も複雑化し、また深刻化しているのに加え、地域のつながりが希薄になり、安心して過ごせる子どもの居場所が少ないという大きな課題がでてきております。

このような社会課題に取り組みながら、「食」を通じて誰もが居場所にできる場所を地域循環型でつくり循環型未来食堂「みんなの食堂」を立ち上げて活動を継続してきましたところ、徐々にこの活動が定着し、しくみやかたちができてきました。これもご支援いただいたからこそと感謝申し上げます。

これからも、食べるのもよし、提供するのもよし、それが地域を元気にするをモットーに福祉には見えない“支援の輪”を広げてまいります。

報告書発刊にあたって

令和4年度報告書発刊にあたり

代表 川崎 敦子

いつも皆様には、ご支援ご協力をいただきありがとうございます。報告書の発刊にあたりご挨拶させていただきます。

今年度は、新しい事業（日本財団子ども第三の居場所・ヤングケアラー支援体制構築モデル事業）に取り組んできた一年でありました。小さな法人がこのような新しい事業に取り組めたことは、多くの関係機関並びに関係者のご協力をいただいたからだと思っております。ありがとうございます。

今回の報告書は、このような関係機関や関係者にも寄稿いただきました。また、実践を進めてきた担当職員、アルバイトの学生のなどの思いも掲載いたしました。

新事業を進める中で何度も何度も当事者の声を真ん中にと確認してきました。この一年、紆余曲折があり七転八倒してまいりましたが、この経験が居場所事業を中心に事業展開をしてきた当法人の確固たる信念を持つことができたターニングポイントになったことは間違いがありません。

この報告書では、当法人の居場所事業への覚悟を感じていただけたらと思います。

地域の居場所

地域循環型未来食堂「みんなの食堂」

人は支援されたいのではなく、誰かの役に立ちたい。またその場所を探している。支援の場所に見えない居場所を創ることをコンセプトに、地域循環未来食堂「みんなの食堂」ができて3年になろうとしている。

1 支援する側、される側と分けず対等場所にすること。 支え支えられる関係。

2 企業や関係機関からフードロス頂くこと。

日替わりの店長に貸し出し運営すること。

お客様は、食べることで運営に協力できる。

3 花しょうぶ通り商店街の「街の駅」で運営することで、地域との協力関係を構築する。

この3点を目標に始まった「みんなの食堂」であったが、多くの方々のご理解とご協力で予想より早く達成することができた。今年には特にWAM助成の援助を受けられない年であった。維持するためには、儲けることを中心にしたビジネスモデルへの転嫁が求められたが、「みんなの食堂」はあえて福祉モデルの道を選んだ。それには、循環型の支え支えられる居場所を必要とする福祉制度のはざまに困っている人がいるからである。日替わり店長は入れ替わりがあったものの、新しい日替わり店長も入ってくださり、開店日数を維持することができた。継続の大きな力になったことは間違いない。

また今年度は、福祉制度のはざまの支援である新しい事業を立ち上げることができた。

「みんなの食堂」営業時間外に、日本財団「子ども第三の居場所」コミュニティモデルの運営、滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業の2事業である。この事業は、当法人にとって新しい事業であることから法人内部での研修を何度も行い専門的な勉強もしてきたが、特に大きな力になったのが多くの専門家や関係機関が手を貸してくださったからであることは間違いない。

このような居場所事業から、福祉の支援につながる人は多い。居場所を利用する人は、まだ自走できる黄色信号の人で、この人たちを赤信号にしないための居場所である。しかし、黄色信号の人が支援の場を求めているわけではないので、青信号の人いわゆる普通の人が利用する場所でないとならない。そのため、普通の場所であること、対応する人は普通の人であることが大事である。居場所の在り方を、改めて再確認できた。地域循環型未来食堂「みんなの食堂」は、食堂という普通の間であること、日替わり店長という普通の人に対応すること、支援の場にもつながることから、私たちの居場所が目指してきたものは間違っていないと再確認することができた。

地域循環型未来食堂「みんなの食堂」が、地域とともに地域のニーズに合わせて形を変えながら福祉モデルとして維持できることを目指していきたい。

(文責 川崎敦子)



「みんなの食堂」 営業日数、販売実績

「みんなの食堂」 営業日数、販売実績

月	営業日数	定食販売数	お弁当販売数	お惣菜販売数	外部販売数
4月	20	58	439	91	95
5月	20	54	409	62	124
6月	22	43	491	75	106
7月	24	55	596	103	92
8月	21	45	616	41	30
9月	17	28	491	54	60
10月	17	51	580	74	123
11月	14	63	338	110	60
12月	12	19	327	98	58
1月	12	49	216	87	41
2月	15	68	279	109	55
3月	4	9	65	10	0
合計	198	542	4847	914	844

※3/10時点

※外部販売...下記参照

《ロケ弁》

日程	販売数
10/14	22
10/22	21
10/27	20

《ランチ広場》

日程	販売数	その他
5/20	50	80
6/17	43	10

他、パリア様催事場にて月2～3回お弁当販売

「食堂マネージャーとして」

Veggy + 大宮 彩菜

もうすぐ、みんなの食堂は3周年を迎える。私が食堂マネージャーとして携わって2年。紆余曲折しながらも、食堂稼働率は大きく低下することなく維持できている状態にある。特にこの1年は月イチイベント(おすそわけDAY)に力を入れ、様々な支援や協力のもと、1度も休むことなくイベント開催できている。

初めは少なかった客足も徐々に伸び、毎月来られるお客さまも増えてきた。少しずつこのイベントが地域に定着してきている印象である。

川崎さんから教えていただいた「食堂の窓口は専門家ではなく、普通の人であって欲しい。」の声に答えられるよう、おすそわけDAYでも必要な支援はお渡しできる手段の一つである。日々の営業におけるお弁当販売やおすそわけDAYを手段とし、誰かと繋がりを持つことで、心の拠り所ができ安心感を持つことができる。堅苦しくなく、フラリと立ち寄れる場所、それがみんなの食堂 居場所の提供に繋がると考えている。

またお客さまだけでなく、居場所を求める方が気兼ねなく店長とやり取りができることが食堂の強みである。食堂営業において大きな変化を求めるのではなく、小さな変化を見逃さず、お客様の声に寄り添い更に親しみやすい食堂に活躍の場を広げていきたい。

「食堂マネージャーとして」

Veggy+ 北村 真穂

2022年、コロナとの共存を社会が模索する中、様々な面で行動制限緩和が進み、私たちみんなの食堂の活動も、徐々に裾野を広げていくことができたと感じている。毎月のおすそわけDAYや商店街主催のアートフェスへの参加など、日々の営業以外の活動にも取り組むことができた。店長との会話からも食堂の利用者が定着してきているとの声が聞かれ、食を通じて地域の人の居場所となっていることが感じられた。

また、日々のインスタグラムなどSNSでの広報活動においてもフォロワー数は増加しており、食堂やおすそわけDAYの新規利用者の広がりの一助にもなっていると思われる。多くの子連れの利用者が増加していることから、地域内外の子どもたちへの認知度が広がりつつあることが伺える。

このように一定の成果が得られるのは店長やボランティアさん、食品提供をしてくださる企業様など皆さまの支えなしには成り立ちたないと改めて感じる。

今年からは「子ども第三の居場所」としての活動も始まったため、職員と連携をとってより多くの子どもが気軽に立ち寄れる居場所となるよう活動を充実させていきたい。そして顔の見える「ゆるい」人とのつながりを大切に、今後もみんなの居場所として笑顔があふれる場となるよう努めていきたい。



「商店街 × みんなの食堂」

花しょうぶ通り商店街振興組合
理事長 和田 かずしげ

昨年度は、花しょうぶ通り商店街と第5のひこね街の駅「みんなの食堂」さんと連動し食、住、健、育をテーマとした4回連続の講座を開催しました。「食」「健」「育」を主に担当頂き「食」「健」をテーマとした事業では、古米をおいしく食べよう、おいしく食べてフードロスのことを考え、フードロスを使用した身体にやさしい料理教室を開催し、「育」では湯浅誠氏による「コミュニティーカフェ、子ども食堂、地域共生社会」題して講演会を開催しました。

コロナ禍により事業規模を縮小しながらも、講座を通じて伝建地区にある花しょうぶ通り商店街や、みんなの食堂事業を認識してもらうなど販売促進、交流人口、定住人口の増加等に結びつけるきっかけができました。

これからも商店街と「みんなの食堂」と協力、連携しながら地域が抱える課題や地域共生社会の実現にむけて、みんなが寄り添える居場所がある商店街としても取り組んでいきたいと思います100の愚痴より10の提案10の提案より1の実行という我々のスローガンのもと！

『ふるあたらしい街』に咲いた未来食堂

LLPひこね街の駅 駅長 小杉 共弘

花しょうぶ通り商店街振興組合は、中心市街地域活性化を図るために、地元の有志、団体、大学の方々と連携協力しながら、地域の歴史文化など魅力ある個性を活かす、ふるくてもやさしい心をもつまちづくり『ふるあたらしい街』をコンセプトに取り組んできた。

『街の駅』とは当商店街を生活の場とする人々、城下町特有の業種や街のつくりの魅力を感じて来訪する人を含む散策ルートを巡る人々に対して、街の歴史や文化、情報やもてなしなどを提供するプラットフォームである。

空き町家を『街の駅』として2005年「寺子屋力石」を学びの場として、2008年「戦国丸」を商店街戦国砦として、2012年「通信舎」(国指定登録有形文化財認定された洋館)を情報発信基地として、2015年「治部少丸」を戦国街角博物館として、そして2022年3月には第5街の駅「みんなの食堂」が地域循環型の優しさ溢れるインキュベーション事業として新たに開業しました。

河原町芹町地区は重要伝統的建造物群保存地区(重伝建地区)に選定され、地元自治会などによるまちづくり推進協議会が発足し街路修景等に向けた新たな取り組みが始まっています
魅力的な美しい街並みの形成、安全、安心な地域づくりなど、住民・NPO・学生等と連携した自主的な取り組みと共にSNSや独自の情報発信機能を有効に活用しながら、商店街および地域の知名度アップを図り、新たなニーズ、ファン獲得を積極的に図ります。

世界遺産を目指す「歴史都市」の伝統的景観の価値は一带を歩いてこそ実感できる。
第5街の駅「みんなの食堂」はスタートアップ事業やビジネスモデルとしても高く評価されるが地域に果たす要としてその価値はそれ以上の素晴らしい事業であると感じている。



日替わり店長

「アジア文化の食」

koreadining みよん保田 千明

約1年みんなの食堂での経験は得るものが多い年でした。

見たことはあっても使ったことのない食材を試行錯誤したり発見が沢山であった。

同じアジアでも作り方一つで違う料理になり、その料理で会話も生まれ、そこから親しくもなり楽しい時間がある。

今の世の中はグローバルに目先だけを見るのではなく、

先の先をどのようにして感じていくなど、料理の奥深さを味わって行けたらと思う。

「食は笑顔の源」

オカンの食堂 加藤 由美子

私がいつも心がけているのは、「美味しい」と言ってもらえて笑顔が増えることである。その笑顔がいっぱいになって、みんなの居場所になることである。

まだ1月から始めた初店長だが、いただいた食材でメニューを考えレシピを探したりして、ワクワクしながらその日を迎えるのが楽しみになっている。ロス無くし、みんなの役に立てるのは幸せである。実際にやってみて、お世話してくださる方やボランティアの皆様の素晴らしさ、次回からの不安もなくなり、今後も続けられそうと思わせてくれるのである。

お店を出そうと思うとハードルが高いけれど、環境が揃っているこの食堂で月1～2回であれば楽しく続けられるかな？と思えた。

「必要とされる居場所に」

弁ちゃん堂 店長 佐々木 悦子

みんなの食堂に携わり、3年になろうとしている。オープン当初、ボランティアから関わらせていただき、店長としては2年目になる。

自分の居場所としてもありがたい居場所だと感じているが、お客様もかなり定着してきて、地域の居場所としても成り立ってきたように感じる。

活動される店長さんも卒業されるかたもあれば、新たに入られる方もあり、みなさんがみんなの食堂で自分の存在意義も感じながら活動されているようにも感じてきた。

昼からは子どもの居場所なども昨年からは始まり、子どもたちも毎週末出入りするようになった。共通して常に感じるのは、地域の居場所、地域の支援の場ということだ。いろんな店長さんが毎日店を開店するが、とにかく開いていることが一番大事だと思った。ここにくれば、何かある、弁当でもランチでも、子どもも預けられる、そんなスポットになりつつあって、あることが大切だと感じる。

そんな居場所に足を運ぶだけでも、何かとやることがあって、自分自身も必要とされていることに気づく。

「チャレンジ」

吉川 茜

手作りが好きで、家族と食事をするのが楽しみな私が、仕事を辞めたのをきっかけに新たなチャレンジとして始めた食堂の1日店長。夫や仲間に支えられ、月2回の営業をしていく中で、自分のご飯に喜んでいただけ、お客様とつながっていくことを肌で感じられ、とても充実した時間を過ごしている。

また、フルタイムの勤務を辞めて、家庭での時間が増えたことで、さらに食事に気を付けるようになり、自分や子どもたちの体調に良い変化があった。つまり、日々の食事では身体は作られるということ。食堂においては、幸運なことにたくさんの野菜を使わせてもらえる。

今後も、食事の知識を増やししながら、少しでも身体の栄養となるような、美味しく元気になるご飯を提供していきたい。

「気になる居場所」

森 恵子

私がみんなの食堂ボランティアに参加するようになって今年で3年目を迎える。最初は花しょうぶ通りのあそこ、何だか気になる、思いきって立ち止まりお弁当を買ったのがきっかけである。今では、月4～5回のペースで店長の手伝いをしている。フードロスの野菜たちが美味しい料理に出来上がっていく様子が見られ、驚きと発見の日々である。

私にとってみんなの食堂は、居心地が良く安心できる、何だかほっこりする、気になる居場所である。今では、引きこもりの息子も月1回のおすそわけDAYに参加している。食堂には息子が作ったアイロンビーズ作品が飾られている。こんな自分でも人の役に立っている、頼りにされる、ということに喜びを感じている。共生社会を目指して共に歩んでいきたい。

「子ども食堂のボランティアに参加して」

アストラゼネカ株式会社 中畑 洋介

ボランティアに参加し、私が1番に感じたことはみんなの食堂の温かさである。何度かボランティアに参加しているが、いつも食堂の方々は笑顔で活動しておられ、生き生きと活気のある食堂の雰囲気はとても素晴らしいと思う。

そして、活動しておられる方々は自発的に行動しておられ、気配りに抜かりがなく、子どもたちにとって良い環境を提供していると感じる。

ボランティア中もプレッシャーを感じることはなく、「できる人ができることをする」というスタイルはボランティア参加者にとっても居心地がよい。

芹川の河童様は子ども達のケアや環境作りにとっても真剣に取り組んでおられ、今後の活動に期待している。これからも何らかの形でお手伝いできればと思っている。



若者の居場所 通信サロン「誰にも会いたくないカフェ」

引きこもりや生きづらさを感じる若者の居場所を彦根市より委託を受け、「何をしてもいい場所・何をしなくてもいい場所」をコンセプトとして運営をはじめ、今年で7年目になる。

利用する若者に「なぜこの居場所を利用するのか」と尋ねると「何をしてもいい場所何をしなくてもいい場所だからです」と答える人が多く、サロンのコンセプトを理解して利用してくださっていること、またそれがいいと思っていることがわかった。

若者の利用期間の制限は設けないのもサロンの特徴である。それは、就労を含む自分の生き方を決めるのは、個人のペースに合わせて支援することが大事だと考えているからである。また、長期にわたる支援は、民間だからこそできると自負している。利用者は、ただサロンを利用することから年数を経て、就労移行事業所や就労相談事業所など併用するようになる。そのほかの事業所に通い続ける応援ができるのもサロンの役割の一つだと、彦根市のケース会議などで認識することができた。

長く利用してきた若者たちの何人かは、今年度自分の未来を考え動き出した。就労継続支援B型、一般就労など様々ではあるが一步を歩みだしたことは、サロンを継続運営してきた中で大きな成果であったと考えている。就労しても「まだ籍を置いてほしい」と望む若者も多く、利用回数は減ってもサロンに時々きて仕事の話をする。継続運営できているからこそ働く気持ちを支えることができると考えている。

就労などで卒業や利用回数が減った若者がいる一方、見学者も多い。特に今年度は、関係機関からの相談というより、個人的に見学を希望する連絡が多いように感じた。見学希望の理由は、チラシを見てきたかったと話される人がほとんどである。見学に来た若者の中には、「久しぶりに家族以外と話した」「ちょっと気持ちがすっとした」と話され利用につながることも多い。しかしながら、利用につながらないこともある。特に、登録までしたにもかかわらずその後連絡できないこともある。それは、支援団体を通してきていないため、見学後の連絡が取りにくい。今後は、見学後の丁寧なフォローと、定期的な情報発信として公式LINEアカウントなどを利用することを検討していく必要があると考えている。

小さな若者の居場所であるが、少しでも求めてくださる若者のために継続し続けることが大事であると考えている。

(文責 川崎敦子)

「サロンのめざすもの」

指導員 米田 紀代子

今年度は体調不良により半年間のお休みを頂いた。ゆえに今年度のサロンの様子は同じ指導員の田中さんの報告書を読んでいただくとして、私からは改めてサロンの果たす役割を確認したいと思う。

2月末に3人の見学者が来た。3人とも他機関から「1人で過ごしてもOK、みんなと過ごすのもOKな場所」と紹介され来所。3人がそれぞれの時間を過ごした後、玄関前で、1人の若者が「久しぶりに家族以外と喋った。生き返った気がする。」とつぶやくと、もう1人の若者も「他人と話して始めは緊張したけど、楽しかった。また来ます。」との言葉を残して、帰って行った。

生きづらさを感じる若者がほんの数時間サロンで過ごした後に、「楽しかった」とつぶやいて帰る。そんな若者の様子が、「誰にも会いたくないカフェ、通信サロン」のめざす姿であると思う。

1人ひとりの歩幅で歩いていく若者を、暖かく見守る居場所こそ通信サロンである。

「場所の役割」

通信サロン 支援スタッフ 田中 紀行

本年度の通信サロンでは、主に目に見える変化として、常に通ってくれている利用者の大半が作業所への就労が決定し、現在通所している。

作業所に通っている利用者にも共通していることは、通信サロンのある火曜日と木曜日に、両日もしくはどちらかの曜日を休みに設定して通信サロンに通えるようスケジュールを調整している点だ。

心身の負担が増えて休みを設けていても通信サロンに通えない日はままあるものの、各々が自身と相談して通ってくれるのはとても素晴らしいことである。

前年度と比較して一日あたりの来訪人数は減ったものの、その分、個人の時間が増え、「くつろぐ場所」としての役割が増えつつあるように見て取れるようになった。まとまった人数が集った日はボードゲームをプレイしたり、共通の話題で盛り上がりつつある中、人数の少ない日は個々で話せる時間も増え、利用者同士によるコミュニケーションも盛んに行われている。

コロナ禍でライフスタイル自体が大きく変化してしまってから徐々に環境は戻りつつあるが、依然として人との接触が制限されている中でも、通信サロンに来訪してひと時を過ごすということは、それだけ利用者にとって通信サロンは「ひと息つく場所」として根付いており、それぞれの役割を担っている大事な時間なのだと思う。

若者たちの声

「今サロンに通っていて思う事」

井上

私は、毎週のように通信サロンを利用させて頂いておりますが、この事について今思う事があります。それは、私にとってサロンが、気の合う方との団らんのお場であったり、交友関係の構築・維持のお場、人間関係が自然（余分に緊張せず）にこなせるようになる迄のお場のように感じております。更にはサロンでの交友関係を通して、今の自分の状態が知れるという事もあります。実際サロンでは、互いに趣味の話や雑談などを楽しんだり、時には悩み事を共有し解決の糸口をアドバイスしてみたりと、楽しむだけでなく、お互いに更に前向きに変化出来る事を願いながら過ごしております。

ちなみに私は元々、何年にも渡り精神及び肉体的に優れない状態が続き、落ち込み、引っ込み思案になり、人間関係を苦手としていたのですが、サロンへ通う事やボランティア活動、精神的不調への治療などを行う為なのか徐々に体調が回復し、人間関係にも少しずつ慣れ、段々と気楽に過ごせるようになってきております。この事は、私も嬉しいですし、家族も含めて親密な相手にとっても付き合い易い状態になって来ていると思います。

最後になりますが、通信サロンは、私のように悩んでいる方々を受け入れて下さる貴重な居場所だと思います。今まで、私を受け入れて下さりましたサロンの皆様には感謝致します。希望（人としての本来の姿・態度）を信じてきてここまで来られました。



「通信サロン活動報告に寄せて」

所属 彦根市子ども未来部子ども・若者課

「社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者たちが自宅からの一歩、社会への一歩を自分のペースで踏み出せるよう、寄り添い、支援する場所としてのサロンを開設する。」

これは、平成29年4月に芹川の河童さんに業務委託した際に定めた事業の目的である。この通信サロンをきっかけに、多くの若者たちが大きな一歩を踏み出したことだろう。

初めて通信舎を訪ねた時、あまりの室内の狭さに驚いた覚えがある。多い時は5人か6人か、それ以上に利用者がいることもあるだろう。はたして、彼らは快適に過ごしているのだろうかと思ったが、窓から差し込む陽気、室内に漂うゆるやかな時間を感じることでできるほど良い狭さなのだ実感した。

行政は何かと決めごとを作りたがる。支援プログラムが設定されていない、「なにもしなくていい」居場所を市が設置している事例は、全国的に見てもとても珍しい。一人でも多くの若者が一歩を踏み出せるよう、この居場所を続けていきたい。

「居場所がもつチカラ」

彦根市社協・地域支援課 課長 森 恵生

「通信サロン」は、市内にある様々な居場所の中でも、ほかにはない役割や機能をもっている。

例えば、数年前に『誰にも会いたくないカフェ』を開くと聞いた時は“カフェなのに？ 誰にも会わないって？ どういうこと？”と少し耳を疑った。だが、そんな居場所だからこそ参加しやすかったり過ごしやすかったりする人がいて、いろんな役割や機能をもつ居場所が増えることで選択肢が広がるという点で、かけがえのない貴重な存在となっている。

また、サロンに来る若者は、ただ居場所で過ごすだけではない。スタッフの寄り添いや声かけなどを通して、お互いの交流や地域とのつながり、イベント参加や有償ボランティアなど様々なきっかけや機会を得て、自分自身のもつチカラを高めている。

決して「通信サロン」だけが素晴らしいのではない。個々の居場所がそれぞれにもつチカラによって、誰ひとり取り残されないまちになっていくように、市社協として共に取り組んでいきたい。

「日々行ける場所としてのサロン」

滋賀県立大学人間文化学部准教授 原 未来

いまの社会では、学校や仕事をやめると行く場所がなくなってしまうことがよくある。それで気づいたらひきこもり状態になっていた、ということもある。所属を失ったとき、どんな状態であっても引け目なく気軽に行ける場所があったら、どこにも行く場所がなくて気づいたら孤立していたということを防げるのではないか。行ける場所は、やがて行きたい場所になり、その人の居場所になるかもしれない。

サロンやフリースペースなどと呼ばれる場は、孤立しがちな人々に対して、まさに日々行ける場所を提供するものだ。それによって、誰かとのかわりが生じたり、多様な刺激を受ける可能性も広がる。

若者たちの行ける場所を地域に多様につくっていく取り組みが必要だが、間違いなくその一つに「通信サロン」はなり、若者たちの日常を支えている。彦根市事業として公的責任の下にこうした活動が実施されていることは重要な意味をもっている。今後のますますの発展を期待したい。

令和4年度 子ども第3の居場所 活動報告

芹川の河童 職員 辻 礼子

コロナ禍で、子どもたちの活動が大きく制約されてしまい、人や地域と触れ合う機会が減ってしまっていたなか、日本財団様の「子ども第三の居場所」を滋賀県で初めて開所させていただくこととなり、今年度5月から、活動を進めている。子どもたちを取り巻く様々な状況は、複雑かつ深刻になっていることを、目の当たりにし、どの子も健やかに育ってほしいと願う。現在、41名の子ども達が登録し、活動に参加している。子どもたちが安心して過ごせる場を創ることで、地域の子育てのコミュニティーを創設していきたいと考えている。協力してくれる地域の大人たちの存在も増え、心強く、ありがたい。家でもない、学校でもない第三の居場所、居場所って何？子どもも、大人も一緒に、迷いながら、悩みながら、進めていきたいと思っている。

1. 令和4年度活動報告

開所式 令和4年5月29日 活動日数 104日（3月6日現在）
事業開始 令和4年6月1日～ 月・水・土 15:00～18:00（19:00）

利用登録者数 41名

未就学	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中学生	高校生
8名	3名	4名	7名	3名	5名	3名	3名	1名

※ 4名未確認

登録者学区（彦根市）

城東小	旭森小	佐和山	河瀬小	高宮小	城南小	東中	南中	高校	その他
3名	2名	12名	2名	4名	4名	1名	2名	1名	2名

合計33名（未就学児除く）

職員体制

常勤	非常勤	学生リーダー	アルバイト	ボランティア
2名	1名	2～3名	1名	若干

① 学習支援

毎週月・火・土を開所日として 月曜日と水曜日は大学生リーダーによる学習支援を中心に行った。一人ひとりに合わせた宿題サポートを中心に、長期休みは、課題を持参して学生リーダーと伴に取り組んだ。支援者と子ども1対1の環境を用意して、普段は集中できにくい子どもたちも、支援者と一緒にする事で集中でき、保護者の方が、いつもと異なる子どもさんの姿に驚く場面もあった。今後も継続しつつ、希望されるご家庭については、宿題だけではなく学習支援の提供を、次年度は導入していきたいと考えている

② 遊びの場の提供

子どもの意思を尊重し、学習以外の他のプログラムも用意して子どもたちが自由にやりたいことができる環境を用意した。こども文庫の開設（読書・本の貸し出し）、絵本読み聞かせ、工作、それぞれの年齢あったボードゲーム、カードゲーム（カルタ・トランプ・百人一首）、外遊び等、支援者も関わって遊んだ。回を重ねることで、子どもたちの創造力や、作業能力が上がり、一人ひとりが力をつけてきていると感じている。子どもの限りない力が発揮できる場所の提供を進めていきたい。

③ 子育て支援（関係機関との連携）・食事の提供

行政・関係機関と連携して、地域の子育ての困りごとに対応した。学校・保育園終了後に居場所を利用し、併設している「みんなの食堂」を通して、夕食の支援及び食材の支援を行った。子ども達が居場所に来る移動手段として、彦根市社会福祉協議会の協力を得て「はぴとも」号の制度を利用した。研修を受けたドライバーが対応して、子どもたちとも仲良くなり、順調に利用できている。今後も行政及び関係機関と連携して、対応してく予定である。

④ 体験プログラムの開催 38回/2022.6～2023.3

毎週土曜日は、体験プログラムとして、季節の行事体験・調理体験・創作（工作）・運動・ゲーム（ボードゲーム・スイッチ）・お話会・地域イベント参加等の活動を行った。また、地域のボランティアに講師をお願いするなど、地域の大人たちとの交流も深め、子ども達の「できた」という感覚を増やせるように取り組んだ。また、他団体や地域の宿泊施設の協力を得て、宿泊体験も行うことができ、大きな経験となり、保護者のレスパイトとしての機能も果たせたと感じている。今後も子どもたちの希望や意見を取り入れて、子どもたちの「できた」を増やせる活動を行っていきたい。

⑤ 広報活動

開所当初、佐和山小学校・城東小学校・東中学校を通じてチラシ配布を2回行ったが、その後チラシの配布は行っていない。次年度当初に、同小中学校通じて配布をお願いする予定で準備を進めている。その他、多数の方を対象にインスタグラムとラインで公式アカウントを開設して、活動の様子を投稿し情報の発信を行っている、ラインはお友達募集のカードを作成し子育て世帯と繋がりが持てるように取り組み、現在数名の保護者と繋がり、メッセージ交換を行っている。今後は、定期的な活動報告（便り）を作成し、近隣地域、関係機関へ配布を行い、情報の発信を行っていく予定である。

⑥ 職員研修

- | | | |
|----------------|------------------------------|------------------------------|
| 1. 2022. 12.21 | 「子どもとの関わり方」
「アタッチメントについて」 | 講師 キッズコーチ協会
滋賀県発達障害支援センター |
| 2. 2022. 12.16 | 「レジリエンスとは何か？」子どもの育ちについて | 講師 滋賀県立大学人間文化学部 教授 松島秀明 氏 |
| 3. 2023. 1.23 | 「子ども虐待防止と子ども対応」 | 講師 子どもの虐待防止ネットワーク滋賀 遠城孝幸 氏 |
| 4. 2022 .2.22 | 「障害のある子どもの支援について」 | 講師 キッズコーチ協会 |

※2及び3については、第3の居場所に関わる学生、ボランティアも受講対象とした。

2. 課題

開所して、10か月が経過して日常の活動は、スムーズに進むようになってきている。しかし、平日の月曜日、水曜日の利用者数が伸び悩んでいて、何か特色が必要であると考えている。それぞれの家族の状況は様々であるが、忙しく暮らす子育て世代全般について学習支援はどのご家庭でも共通課題であると考えられ、①でも触れたが、学習支援を強化した取り組みを進めていければと考えている。

さらに、活動の場の空間利用について、子どもたちが安心・安全に過ごせるよう、それぞれの子どもに合った環境を整備する必要があると考えている。パーテーション等、必要な機材を導入して整備を行っていく。災害に対する備えについて、早急に対応して、準備する。

居場所は子どもたちにとって安らげる場所であることが必須であり、今後も 受け入れ体制を整え、多くの子どもさん、地域の皆さんの安心・安全の居場所となっていくよう事業を進めていきたいと考えている

「子どもが大事にされる場所」

松嶋秀明・滋賀県立大学・教授



2022年5月に「子ども第三の居場所」が開所した。家庭では保護者に気をつかい、学校では学習につまづき、仲間関係でうまく自分がだせないでいる子どもにとって、そのどちらでもない「第三の居場所」がもつ意味あいは大きいと思う。大学生スタッフなど、普段は接したことがない大人との（タテでもヨコでもない）ナナメの関係のなかで大事にされる体験、思い切り遊び、自分が興味があることを主体的にふかめていける体験を通して、将来にわたって幸せになるための活力の「貯金」ができればと思う。「みんなの食堂」と同場所にある強みをいかして、おにぎり、アイスクリームなど、いろいろな料理体験プログラムがあるのはもちろん、居場所にたくさん揃っているボードゲームの体験、そして彦根市にあるかっぱ伝説を題材として彦根市の街歩きなど、いろいろなプログラムが企画されている。いずれも子どもが普段なじんだ生活とは少し違う魅力がある。課題は、まだまだ子どもが十分には集まらないことだろう。学校との連携、他の地域へ出張など多様な発信をつづける必要があるだろう。

「居場所を支えるしくみを」

つながり若者センター・統括コーディネーター
滋賀県スクールソーシャルワーカー
中島 円実

「第3の居場所」が必要と言われる。提唱したアメリカの社会学者によると、第1は、「家・家族」、第2は「学校・職場」だそうだ。家族や学校、職場では、それぞれ役割や責任があり、プレッシャーもあるが、それらから解放され、好きな事をしたり、ありのままの自分で居られる“場所”が必要だと。今、国をあげて子どもに第3の居場所を作ろうとしている。しかし、その目的は、安心できる第1第2の居場所がない子ども若者たちに代替、補足として与える場所の設置である。おいしい食事、温かい笑顔、気兼ねなくのんびりできる空間・・・本来、社会として責任をもって支えなければならない第1第2の部分にNPOなどの民間団体に依存している。そして多くの第3の居場所の経営は苦しい。子ども若者には、いや大人も、様々な体験や多様な価値観、なによりたくさんの愛情を与えられることが必要である。特別な場所でなくてもいい、しかしその存在意義を十分に認め、社会として支えていかなければならない。

「安心できる居場所を目指して」

子ども第三の居場所学生リーダー 村田菜緒

私は、子ども第三の居場所の学生リーダーとしてアルバイトを行っている。川崎さんから子どもの居場所を開設することを聞き、地域の子もたちの役に立てるなら参加したいと思ったことから始めた。

開所直後は利用者がおらず、食堂の前に看板を置き、通りかかる人に挨拶をした。初めて子どもが来てくれた時はとても嬉しかった。今では、食堂が子どもで賑わうことも多くなった。

来所を重ねるにつれ、子どもたちの笑顔や会話がだんだん増えていくのを見て、この活動をしていて良かったと思う。自分たちの手で1から子どもの居場所を作っているという実感があることにやりがいを感じている。逆に難しいことや課題を見つけると、学生同士で話し合ったり保育を専門とする先生方に助言を頂いたりしながら解決策を考え、一つずつ実践している。

これからも、子どもたちが安心してありのままにいられる温かい居場所をつくるため、努力していきたい。

「子どもたちから学んだこと」

学生リーダー 藤井麻衣

私は、学生リーダーとして、開設当初から関わらせていただき、非常に貴重な経験をできた。学校や家とは違う、見守って自分を受け入れてくれる場所があり、そこで待ってくれる人がいる。そんなふうに子どもたちに思ってもらえるようになりたいと私は考えていた。しかし一からのスタートであったため、存在自体を広める重要性や、足を運んでもらうため、また来たいと思える動機を作るためには、企画の工夫が大切であると実感した。

企画を行う中で、おにぎりづくりひとつであっても、子どもたちが自分でできたという成功体験が主体性を引き出し、自信につながるのだと、目の前のリアルな声や表情から気づかされた。しかし、うまくいったことばかりではない。関わり方や声の掛け方ひとつでも上手く伝わらなくて悩んだこともある。そんな中でも学生同士で支え合えたり、第三の居場所に関わって下さった先生方のアドバイスや、支えのおかげで自分を振り返ったり、正しさよりも、捉え方や広い視野を持って子供をとらえる大切さを学ぶことができた。

正解はわからなくても、今目の前の子どもたちが求めている、発している言葉、表情にはどんな意図があるのかを考え、向き合う大切さを忘れないでいたい。

「これまでの活動を振り返って」

子ども第三の居場所、大学生リーダー 山口壮太

私は第三の居場所で大学生ボランティアをさせていただいて、子どもたちと何かものを作ったり、お出かけしたり、一緒にボードゲームをしたり、色々なことを経験した。それらはささいな出来事だが、すごく特別で楽しい時間だった。

全く知らない大学生や大人に子どもたちはとても懐いてくれて、感情も素直に出してくれて、子どもたちの純粋さ、可愛さを改めて感じた。学生リーダーとして、大きな役目が果たせたかは分からないが、毎回訪れた子達に対して、この居場所での時間を楽しんでもらおうと子どもたちのやりたいことや、気持ちに伝えようと思いつきながら接していた。

また、スタッフの方々もとても優しく、毎回楽しんで参加できたし、大人の人達と会話してるだけでも落ち着く時間が多く、自分自身も第三の居場所を自分の居場所のように感じた。普段生活する中で、大人や子どもたちと一緒に遊んだり、お出かけしたり、話したりする機会は中々ないと思うので、子どもたちだけでなく、訪れた皆にメリットがあるのがこの第三の居場所の魅力であると思った。

これからもこの場所で色々な交流ができて、それが広がっていくことに期待したい。

「子どもと楽しむ空間」

滋賀県立大学人間看護科学部人間看護学科 学生リーダー 弘中真由

私は子ども第三の居場所で、子どもがいない日は次の土日に開催するイベントに関するポスターを作成し、子どもや保護者の方々がイベントの開催に気付き参加してもらえるように努めた。また、活動場所を適時清掃、整理することで子どもたちが安全に過ごすことのできる環境を作った。

第三の居場所開設当初は、なかなか子どもの参加がみられなかったが、様々な職種が連携しあい、第三の居場所の存在を広めていくことで子どもの参加がどんどん増えていった。多職種連携を行うことで第三の居場所を必要とする子どもや保護者に情報が提供され、利用につながる場面を見て多職種連携の大切さを学んだ。

第三の居場所を利用した子どもたちとは発達段階に合わせてボードゲームや絵本の読み聞かせなどを一緒に取り組むことで子どもたちに「楽しい」と笑顔になってもらえるように一人ひとりを大切に関わった。様々な個性を持った子どもがどのような環境であればのびのび楽しく遊べるか話し合い、事前に準備したことも「楽しい」と言ってもらえた要因だと考える。

「アルバイトを通して感じたこと」

学生リーダー 上田結貴

第三の居場所のアルバイトを通して、子どもについてふれ合う機会が多くなり、様々なことを感じれるようになった。支援を必要とする子どもたちが何を求めているのかを考えるようになった。第三の居場所が子どもたちにとって、新たな居場所になるように、まずは子どもたちとふれ合い、寄り添い、ここが安心できる場所だと感じれるようにした。例えば、初めて利用する子どもたちには、まず、話しかけ、ゲームなどを通して、一緒に仲良くなれることから始めた。

その次に子どもたちの会話に耳を傾けて、子どもたちがどのように感じているのかを察知し、子どもたちにとって自分たち大人が自分の話を聞いてもらえる場所だと思ってもらえるように子どもたちに接した。

このようなことが、少しでも子どもたちにここが自分の居場所だと感じてもらえたらいいと思う。このアルバイトを通して、新たな発見が様々あり、子どもたちにふれ合う機会があつてよかったと思う。

「学生リーダーとして」

日中一時支援事業、学生リーダー 角田涼太

日中一時支援事業、学童、子ども第三の居場所の活動に参加する中で、様々な子ども達と出会ってきた。子ども達にはそれぞれ全く違う性格や考えがあり、そこから生み出される発想にはいつも驚かされるのと同時に、子どもの持つ大きな可能性を感じている。

学生リーダーの役割は、お兄さんお姉さんのような立ち位置で、子ども達に寄り添うことであると考えている。私自身も子ども達を見守りつつ、ゲームやアニメ、最近流行りの曲などについての何気ない会話をしたり、一緒に遊んだりしている。そのようにして一緒に過ごす中で、子ども達が楽しそうに笑っている顔を見ると、学生リーダーの存在意義を実感する。年齢が近く、友達と話すような感覚で話せる人がいるというのは、居心地の良さにつながるのではないだろうか。

これからも子ども達の心と体の安全を第一に考え、彼らの意思を尊重することを心がけたい。



利用者の声

「ほっこりする場所」

中畑 奈緒

核家族化にコロナウイルスが重なり、関わる人や行動範囲が限定されることが多くなり『子どもが接する世界が狭くなっているのではないかと危惧していた時に、みんなの食堂に出会い、我が子に新しい出会いや体験をさせてあげることができた。

主に土曜日に参加しているが、毎回工夫を凝らした企画がいっぱい。

普段、家庭にない経験ができるため、我が子はいつも楽しみにしている。

また、幅広い年代の方や学区を超えた友達と関わることは、考え方の幅を広げたり、相談相手が増えることに繋がっているだろう。

また預けるだけでなく、親が活動に参加できる点もありがたい。

我が子を見守ってもらえるため、同じ空間でゆっくり過ごしなが、職員さんやボランティアの方と他愛もない会話をする時間が、親にとっても気が休まるひと時となっている。

見守られている子が大きくなったら見守り役のボランティアとして参加する、そんな循環でみんなの食堂が続くことを願う。

ボランティアの声

「初めての活動に参加して」

志萱 早紀子

以前から「地域の子どもたちが安心して過ごせる場所がある」と聞いてはいたけれど、なかなか参加するのに躊躇していた。5月の末に「子ども第三の居場所」事業・プロジェクトが始まって7ヶ月経過したクリスマス・イヴの日に、サンタクロースに扮した主人とカップケーキ作りを任された私は、子ども達とクリスマス会に参加することになった。

まず子どもたちが素直で明るい表情でしてくれた事で、私達大人も安心して

活動する事ができた。サンタクロースからのプレゼント渡しから始まり

その次はカップケーキ作り。各自が初めて触るハンドミキサーに目を輝かせ、

しっかりと卵を泡立てることができた。

またオープンの前に立って焼き上がりを待つ子ども達の目は、本当に純真な目をしていた。時間配分等問題点もあったが、まずは子ども達との距離も縮まりこれからの活動が大変楽しみである。

「ありがたい言葉に胸キュンする時間」

青山 武史

子供達の夕食を作る事になり、初めは好きな料理を作るのが良いのかバランス良い料理が良いのか悩みました。やはり体は食べた物で出来ているので、バランスの良い定食をそのまま提供する事にしました。

子供達は美味しいご飯をありがとうって気持ちを伝えてくれて凄く胸キュンしました。

子供達と一緒に遊んだりしてる中で私も童心に帰る事もでき楽しんでいます。

時間共有が増えるほどにスキンシップとわがママが増えてきましたが、それは距離が近くなって良かったと思っています。やはり愛情が十分に届きにくい環境での暮らしをおくっているから、わがママを言える環境も必要だと感じました。

同じような境遇の子供達が他にもいるなら第3の居場所でみんなでワイワイ楽しみたいと思います。



食でつながる 若者の支援

Aさんのこと

芹川の河童 職員 辻 礼子

私がAさんと出会ったのは、2022年の春から夏になりかけた頃です。私は、まだ職員になったか、なっていないか、程度の時で、Aさんも、後に聞くと「こいつ誰や」と思っていたそう。

「誰にも会いたくないカフェ」や「子ども第三の居場所」で、時々出会ってというか、同じ空間にいたという感じ。そのうちに「カフェ」でゲームをしている姿を見たり、「居場所」で学生リーダーとゲーム講習をするときに、レクチャーしてもらったりで、とっても各種ゲームに精通している人だとわかってきた。

Aさんは、訳あって「みんなの食堂」の2階に下宿をしていて、どちらかという、いつも部屋にいて、昼夜逆転になることが多い。第三の居場所活動日も同じ建物内にいるので、そのうちに、ちょっと人が足りない時に助っ人として関るようになってきていた時、土曜日の体験プログラムに「ゲーム大会をしよう」という案が出た。

大人数でする対戦型のスイッチゲームや、ボードゲームをしたいな、という事になり、それなら、ゲームマスターが要るということになった。Aさんに頼もうということで、話をした。最初は驚いた様子だったが、辻も一緒にするからということでも了承してくれた。その後は、必要な物のリストアップ、機材の配置とレイアウト、時間配分、ゲームソフトやボードゲームの選抜等、Aさんに聞きながら、準備が始まり、当日の進行もAさん主導で進めることとなった。

今までにない大勢の子どもたちが来てくれ、大盛況で終わった。それ以降、自ら提案し進行してくれていて、ゲームの師匠として尊敬し慕う子どもさんも現れた。

その後、第3の居場所スタッフとして、シフトに入ることとなり、子どもたちに人気があり、保護者さんからも受け入れられている。

Aさんは、自分の得意分野である、ゲームで、ゲームマスターをしたことで、生活の中での本人の居場所ができ、出番が回ってきた。出番は彼の積極性を生みだし、その積極性は、社会への接点へと繋がっていくと思っている。

Aさんは、現在、福祉的就労の就労継続支援B型事業所に、週3日通っている。これからのAさんを楽しみにしている。



ヤングケアラー支援事業
令和4年度滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業

令和4年度7月より滋賀県「ヤングケアラー支援体制強化事業」を受託。
受託にあたり、このような事業が受けることができるのか、法人内でかなり議論した。子ども第三の居場所も6月に開所したばかりで軌道に乗っていない、地域循環型未来食堂「みんなの食堂」も3年間の助成金が外れたばかりで運営もできるかどうか分からないからである。しかし、子ども第三の居場所、地域循環型未来食堂「みんなの食堂」があるからこそ、この事業を受ける意味があるのではないかと考えられる。モデル事業ということでは、今後一から始める取り組みがモデルになるのではないかという思いで、お受けすることにした。ヤングケアラーとは、どのような状態の子どもを指すのか、支援とは何なのか、わからない状況から始めた。多くの関係機関のご協力を賜り、立命館大学斎藤真緒教授、スクールソーシャルワーカー上村文子さんにご指導いただきようやく当法人がするべきこと、これからしていくことが見えてきた状況である。

この場を借りて、手を貸していただいた皆様に感謝の意を表したいと思う。ありがとうございました。
(文責 川崎敦子)

1, 法人主催研修

① 「滋賀県ヤングケアラー支援体制強化事業」法人内部研修会

講師：立命館大学 斎藤真緒教授

日時：令和4年7月30日（土）

参加人数：20人

内容：ヤングケアラーとは何かという基本的なことから世界の情勢、日本が抱えるヤングケアラー問題などを教えていただいた。

② 令和4年度滋賀県ヤングケアラー支援体制構築モデル事業

キックオフイベント特別講演会

「ヤングケアラーを知っていますか」

講師：立命館大学斎藤真緒教授 ピアサポーター河西優氏

日時：令和4年10月12日（水）（9/30予定が台風で延期）

参加人数：25人

内容：行政・関係機関向けにヤングケアラーの支援についてお話いただいた。

③ 啓発講演会

「ヤングケアラー・当事者の声を聴いてください」

講師：立命館大学 衣笠総合研究機構研究員 河西優氏

日時：令和5年2月4日（土）

参加人数：15名

内容：「さやかとりき」という外国をルーツにもつ子どもと家族に関するドキュメンタリーを見て、ワームショップ形式でヤングケアラーの声の出しづらさについて考えた。

④ ピアサポーター養成講座

講師：立命館大学 斎藤真緒教授

日時：令和4年12月27日（火）

参加人数：10名

10名のピアサポーターが誕生



2, 公式LINEアカウント開設

① オンラインQRコードカードの作成、配布

当事者の目に触れやすいようにカード形式で作成、第1弾として2月から3月に県内の東部、北部の高校22校に配布。学校からのお問い合わせも多数あり、反響の大きさを感じた。

② オンライン相談室開設

支援事業所からつながった若者ケアラーと、本人の興味のある事柄について定期的にやり取りをしている高校へのカード配布からヤングケアラー当事者と繋がった。ピアサポーターが現在やり取りを続けている

③ オンラインサロン

ヤングケアラー当事者と多くつながることができず、すぐにサロン開設はできなかったが、大津こどもソーシャルワークセンターのご協力で第1回オンラインサロンを開催。当事者からのオンラインサロンに関する意見をお聞きした。

「オンラインであろうと顔の見えない関係で、やり取りはしにくい。まずは、会ってどういう人かわかってから、オンラインでやり取りができる」とのご意見をいただく。オンラインを繋がるためのツールにするのではなく、繋がり続けるために利用することが必要であると感じた。



3, 子ども第三の居場所「みんなの食堂」の利用

彦根市子育て支援課とのケース会議を経て、11月より8名のヤングケアラーの子どもたちと関わりを定期的に持つこととなった。特に、小さい学年の5名は週1回居場所利用と食事提供を行っている。「みんなの食堂」までの送迎には、彦根市社会福祉協議会のご協力ではびとも号（近江タクシー）を運行。地域のボランティア、「みんなの食堂」日替わり店長のご協力で、食事提供を行っている。また、(株)パリヤさんや彦根市社会福祉協議会のフードバンク、滋賀県社会福祉協議会などのご協力で家庭への食材提供も行っている。特に、居場所に来にくい中高生の当事者については、食材やお弁当を配布。

食事場面は、ピアサポーターや子ども第三の居場所学生リーダーも食事を共にすることで、暖かい雰囲気での食事の時間が持てるよう工夫している。「おいしいね」「楽しいね」と子どもたちが笑いながら食べている姿を見ることができた。

また、この食事提供で根本的なヤングケアラーの解決につながるわけではないが、当法人が大事にしてきた『食で繋がる』ことは、当事者につながりにくいヤングケアラー支援の入り口になることができるといことが分かった。食で繋がるからこそ、繋がりが続けたいと考えている。



4, ヤングケアラー小学生合宿「ひこキャン」

大津のこどもソーシャルワークセンターとの共同開催で、彦根で小学生の合宿を開催した。

参加者：彦根 小学生3名、支援者5名
大津 小学生10名、支援者13名

日：令和5年1月4日（水）～5日（木）

宿泊施設：とばや旅館（彦根市花しょうぶ通り商店街）

内容：一日目 周辺散策、食事作り、ゲーム大会
2日目 ヤンマーミュージアム

彦根から参加した子どもは大津の子どもとなじめるのか心配があったが、支援者が多いことからスムーズに入ることができ、二日間たっぷり楽しむことができたようである。私たち支援者も、こどもソーシャルワークセンターの支援者と話ができ、ヤングケアラー支援について学ぶことができた。ピアサポーターの学生は、自分はヤングケアラーを他人事のように思っていたが、今回話せて自分もヤングケアラーだったかもしれないと話していた。また、宿泊をする意味として 家から出る経験をしておくことが大切ということもわかり、今後の取り組みにも取り入れていく必要があると考えている。

5, 校内カフェの開催

今年度、校内カフェの開催を予定していたが、開催することはできなかった。学校とのつながりで開催するものであることから、まず私たちが校内カフェの意義や必要性を知ることが大事であると考えている。急いで形だけ開催するのではなく、必要性、意義をしっかりと話し合い進めていきたいと考えている。

大津のこどもソーシャルワークセンターが開催する大津清陵高校の校内カフェ、神奈川県横浜市のNPO法人パノラマの校内カフェなど見学をさせていただいた。また、NPO法人パノラマ主催の校内カフェ研修も受講



6, 啓発活動

- 1 彦根市社会福祉協議会 第1回つながろうつなげよう相談機械交流会 講演
- 2 長浜市人権施策推進課 講演

いずれもヤングケアラー支援についての講演を行う。今後も、啓発のため積極的にお受けする。

7, 職員研修

- 1 2022年度当事者とともに考える子ども・若者ケアラーのための専門職養成講座 1名受講
- 2 YCARPイベント 子ども・若者の声を聴く オンライン受講2名
- 3 孤立・孤独対策推進事業 つながることで見えるちょっと素敵な未来を描くフォーラム 1名参加
- 4 NPO法人パノラマ 校内居場所カフェスタッフ養成講座 1名受講

課題として

ヤングケアラー支援は、当法人としては始めたばかりでやっと繋がり出したところである。今後、多くの当事者と繋がるためには、学校、行政、地域と連携していくことが大切だと考えている。連携の輪を広げていく取り組みを今後は考えていきたい。

- 1 子ども、学校に認知されるために、公式LINEアカウントのカードを配布する。まだ、配布できていない中学校、小学校に配布。加えて再度高校にも配布していく。
- 2 教育委員会、学校と連携して校内カフェを実現する。支援者の顔が見える出会いの場を作ることは、支援の入り口になりやすい。また、食を提供することは参加する意味がありつながりやすくなるのが、昨年の経験からわかってきた。
そのためには、校内カフェをすることは、多くのと当事者と繋がるためには必要である。
興味のある学校から連携し、始めていく。また、食を提供してくださる企業や団体と連携し、安定した食材の提供ができるようにする。
- 3 カードや校内カフェで繋がった当事者を中心に、オンラインサロンを定期的にできるように体制を作る。一番難しいと考えられるのは、当事者の参加である。そのために、公式LINEアカウントを活用して、情報発信を定期的し繋がり続けていく。
- 4 子ども第三の居場所に今後もピアサポーターを配置し、より多くの当事者を受け入れられる体制を整える。子ども第三の居場所で送迎体制が作られるので、近隣の市町村の当事者も受け入れていく。
- 5 近隣の市町村と連携し、勉強会などを開催しながらヤングケアラーの支援に対してのお手伝いをする。
- 6 行政・学校・地域・関係機関と連携していくためには、事業の進捗状況の情報発信をしていくことが必要であると考え。定期的に『だより』の発行をしていく。

NPO法人芹川の河童は、長年、地域でのつながりを大事にしながら、子どもたちの支援に粘り強く取り組んできていました。こうした活動経験と支援ネットワークが整っている芹川の河童が、滋賀県のヤングケアラーピアサポート事業の担い手になったことは、滋賀でのヤングケアラー支援の展開において、極めて重要な意味を持つと考えます。

子どもたちが直面する課題は、自己責任が強調される今日の社会において、複合化していると同時に、ますます見えにくくなっています。まだまだ「ヤングケアラー」という言葉は、子どもたちにとって身近な言葉になっていません。家族だからやって当たり前、親を責めることになるのではないかという不安によって、自分のことを「ヤングケアラー」だと思っていない／思えない子ども・若者はたくさんいます。支援者・大人も、家事や身体介助など、わかりやすいケアにのみ目を奪われがちで、ケアラー本人も気づきにくい感情面でのケアや、キャリアや夢をあきらめざるを得ないといった将来への漠然とした不安は、依然として取り残されがちです。

子ども・若者が、自分の生活圏域で、安心して立ち寄れる場所があるということ、その中で、親や先生とも違う、地域の大人と安心してつながることは、子ども・若者が、自分たちの生き方を広い視野で考える上での、大事な土壌になります。芹川の河童は、食やゲームなど、何気ない会話が弾む楽しいプログラムメニューを、これまでの活動で培ってきています。「ヤングケアラー」だから支援する、のではなく、「ヤングケアラー」を含む、大小いろんな悩みをかかえるすべての子ども・若者が気軽に利用できるような、今まで以上に楽しい地域拠点に発展することを、期待しています。

ピアサポーターと対話を

子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト（YCARP）発起人
立命館大学 衣笠総合研究機構人間科学研究所 研究員

河西優

芹川の河童さんには特にピアサポーターとの伴走支援に期待しています。ただ、ピアサポーターと伴走して支援するには、支援者がピアサポーターと対話し、理解することが必要です。私は25歳の若者ケアラーとしてピアサポーターに関わっていますが、支援する立場でありながら、色々な問題に直面する立場でもあります。ピアサポートに関わる若者たちは、家族との距離化にまつわる悩み、将来のケアへの不安といったケアや家族に関わる問題に加え、ピアサポートをする者としての葛藤をもっていることが多いです。

つどいの場における自分自身の立ち位置・言動が他の参加者に与える影響、自分自身の仕事や生活とピアサポート活動との両立をめぐる悩み、「子ども・若者ケアラー」といつまで名乗るかなど…。

ピアサポートと協働で支援するためには、支援をピアサポート任せにしてしまうのではなく、その時々で支援者が立ち止まってピアと対話し、こうした葛藤も含めた思いを理解し、フォローする必要があると感じています。

芹川の河童への期待

彦根市子ども未来部子育て支援課 課長補佐 北川 一

彦根市では、様々な困難を抱えた子ども・家庭への支援を行っている。その中には、地域だけでなく、親族からも支援が受けられず、孤立した中で子育てを行っている家庭も多くある。そういった家庭には、市職員が調整役となり福祉施策だけではない各種サービスをきっかけに社会とつなぐことで、家庭が抱える困難を解消しようと取組を行っている。

しかし、子ども・家庭が抱える困難は年々多様化しており、既存のサービスでは対応できないことも多く、ジレンマを抱えることも増加している。

そのような中、特定非営利活動法人芹川の河童様が令和4年度に新たに開始された「子ども第三の居場所」、「ヤングケアラー支援」は、困難を抱えた子ども・家庭の支援への大きな力になるものと期待するものである。

すでに、彦根市が支援をしている子ども・家庭の中でも利用につながった事例では、きめ細やかでかつ柔軟な支援をいただいております。抱えている困難の軽減につながっている。今後も、行政と民間双方の長所を生かし、短所をカバーしあうパートナーシップを構築し、子ども・家庭の支援を共に担っていただきたい。

「はぴとも号」による居場所参加

彦根市社協・地域支援課 田中 良樹

「はぴとも号」は彦根市社協による子どもの幸せ応援基金の活用事業のひとつで家庭や学校以外の子どもの居場所への参加機会を提供する送迎支援事業である。

子ども第三の居場所への送迎にはぴとも号を活用され、その中でヤングケアラーと思われる子の支援に間接的ではあるが、関わっている。送迎自体はタクシー利用とはいえ、保護者の同意、日程や条件の調整等が必要であり、特に大切な家族との信頼関係の構築については第三の居場所スタッフが丁寧に進めてこられた。ヤングケアラー支援については本会としてもまだまだ手探りの状態であるが、芹川の河童さんが開催される研修や支援者の話を聞くことで、その実情や関わりの困難さを知る機会を得られた。

子ども第三の居場所とヤングケアラー支援のように、開かれた居場所の提供と個別支援を継ぎ目なく行うことができるのは、芹川の河童さんの強みである。子ども・若者達への自然な関りの更なる広がりの為に、今後も協力していきたい。

若者の就労体験や就労を支えるための居場所
ナイトケアサロン「誰にも会いたくない夜」

慣れたところでの就労体験や就労を実現した若者の支援として、三年前から「誰にも会いたくない夜」を開催している。

開催日：第3火曜日
開催時間：16時～20時

地域循環型未来食堂「みんなの食堂」のフードロスの食材を使い、若者が食事を作り、支援者とともに食事をしながら楽しい時間を共有することをコンセプトに開催している。この居場所も『何をしてもいい、何をしなくてもいい』場所づくりを心掛けている。

今年度は、昨年に比べると若者の参加率は低くなってきているように感じる。仕事に定着できた若者が卒業したこと、仕事ができなくなり来なくなった人などもいるが、新しく参加を希望する若者もいる。

平均10名程度の若者が参加。

『何をしてもいい場所 何をしなくてもいい場所』だからあいまいなルールで開催してきたが、担当職員が想定していなかった若者の参加の仕方などがあるためルールを設けるべきか設けない方がいいのか考えさせられることがある。あいまいだから参加しやすい面もあるが、そのことで様々な問題があることから、一定のルールを設ける必要があるのではないかと議論している。

若者の夜の居場所も、少しずつ地域にもできてきていることは喜ばしい。しかし、同じ利用者が参加することもあり、情報交換をする必要があると感じている。

日々仕事をする中で、相談するような大きな悩み事ではないが、ちょっと気になる、もやもやするような小さな悩み事は、直接相談で解決するより楽しい時間を共有することで解決することがあるということも、開催して3年間で分かってきた。当法人の居場所やほかの団体の居場所も含めて、多くの居場所があるからこそ支えられると考えている。だからこそ、居場所の情報共有は今後より必要になるであろう。

(文責 川崎敦子)

仕事帰りに寄れる心地よい居場所

園山美恵

誰にも会いたくない夜は、毎月第3火曜日に開かれる。この日は、退勤すると同僚と一緒に、一目散に会場であるみんなの食堂に向かう。中に入る前には中の様子が見える。周囲は静かななか、ここだけが明かりももれて、中の人たちの楽しそうな様子が伝わってくる。

「遅くなりましたー」と入っていくと、「お疲れ様」という声と同時に、私たちの食事を準備してくださる。まずはお腹いっぱい食べながら、他の人たちの話に耳を傾ける。そのうち、隣ではボードゲームが始まっている。また、別のテーブルでは、まだ他の料理を作り始めている。それぞれやりたいテーブルに移動して、自由気ままに過ごす。

最初は晩御飯を食べる場所としか思っていなかったが、回を重ねるごとにそれは変わってきた。なんの気兼ねもなく、ただただのんびり食べたり話したりするだけ。それができるから心地よい居場所になっている。

若者たちを育てるかけがえのない居場所と空間

さざなみ学園 園長 辻 亨



滋賀県北部地域で唯一の児童福祉施設であるさざなみ学園は、様々に課題を抱えた学齢期の子どもたちが入所をする児童心理治療施設である。学園からは毎年、高校3年卒業年齢を中心に、5名前後の子どもたちを地域に送り出している。

退所後は進学、一般就労、福祉就労など様々で、総ての子どもたちには引き続き大人の寄り添いが必要であると常々感じている。こうした中で、通信サロンやみんなの食堂、就労支援事業など、多くの事業で学園を退所した若者たちもお世話になっている。

その中で、学園を退所後、数年にわたりご支援をいただいている若者が、日々の寄り添いのお陰で就労意欲が高まり、この春に彦根を離れ、新たな地でひとり立ちをすと言う。大きな、大きな一歩である。

その他、引きこもり傾向のある子どもたちが安心して気軽に立ち寄れる場や一人で静かに居られる環境の提供など、地域の方々とスクラムを組んだ取り組みと、根気強く温かい寄り添いの場がここにはある。

若者の声

感想 (Mさん)

毎回参加しているが、毎回違う料理を大人数で作ったり食べたりして、いつも楽しみにしている。

感想 (Eさん)

月一度でも、大勢の人で食べる機会があってよかった。普段話ができない人達に、会えてうれしい。

感想 (Nさん)

作って食べて話ができる楽しい。

感想 (Iさん)

誰夜ではいつも美味しく暖かい食事をいただいている。ご飯を食べてゆっくりしているだけだが、それでも良しとされるあの空間に居心地の良さを感じる。自分は仕事終わりに行くことがほとんどで食事の準備はできないが、後片付けには参加できるので、そういった部分で食べに来ていただけと負い目を感じずにまた来ようと思える。



若者の就労体験。就労を支えるための支援
相談事業

就労体験で納得がいけないことがある人や就労を始めたが自信がないなど、若者の支援は社会への一步を踏み出しても終わりではない。むしろ、この時期をより丁寧に支援する必要があると感じている。そのため、当法人では働きだした若者のための相談日を設けている。

内部の人には言いにくいのではという配慮で、外部の方をお願いしている。内部には一緒に働く人もいるため言いにくいことがある、また近い人にこそ聞かせたくない個人的な悩みも話しやすいように、相談員は外部の方をお願いしている。相談員は必要なことは法人に伝えるが、話してほしくないことは言わないがこちらの指導方針に対して意見をいただくことになっている。

若者は働きながら「役に立っているのか」「認められていないのでは」など不安になることがある。相談で仕事の不満や不安を吐き出し聞いてもらうこと、アドバイスを受けること、応援してもらうことで支えられてきた。また、相談員を通して法人への要望を伝える若者もいる。

相談事業を始めて3年、当初から相談を受けていた放課後児童クラブに就労した若者が2名、相談から卒業することができた。

(相談は、保護者・地域の方も実費で受けしてもらっている)

相談員 (株) アットスクール代表取締役、一般社団法人発達サポートすまいる代表理事
鈴木正樹 氏

以下 鈴木氏の言葉 (昨年報告書より抜粋)

NPO法人芹川の河童では、不登校やひきこもりなど毎日の生活に生きづらさを感じている若者たちの居場所として「誰にも会いたくないカフェ」(通信サロン)やナイトケアサロンとして「誰にも会いたくない夜」(みんなの食堂)を開設している。

悩みを抱えた若者同士がお茶を飲みながら話したり、ゲームをしたり、ただぼーっと過ごしてみたりなど、自宅から出てカフェに来ることで、まずはありのままの自分に向き合い、そして人とのコミュニケーションに慣れていく中でこれからのことを考える場となっています。

青年たちの生きづらさや悩みの原因や背景は多様であり、これまでに不登校を経験したり、就職先でもうまく適応できずに離職を繰り返したり、その結果自信を失い自己否定や精神疾患に至るなどの青年も多くいます。

彼らが社会復帰をしていくためには、自分の良さに気づくと共にストレス対処やコミュニケーションの力を育てていくためには、個別相談の中で自己認識を促し、ソーシャルスキルを身につけていくことが再チャレンジのきっかけを作っていきます。

相談支援は月に1回、個別に時間を設定し、一人ひとりの悩みごとや困りごとを伺い、解決に向けた助言を行っています。

これまでも、家から出られなかったケースや職場での人間関係に悩み精神疾患を患っていたケースもありましたが、半年後、一年後のありたい姿を具体的にイメージすることで生活リズムが改善し、外出や再就職ができるようになっていきます。

また同法人が実施している若者就労支援事業「誰にも会いたくない夜」では再チャレンジした若者たちの余暇活動と共に心のケアの場として地域の方々とのつながりを持ち、ステップアップできる場として機能しています。

令和4年度 相談
実績

(人)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
7	8	9	6		6	6	7	6	6	6	4

若者の居場所 若者就労体験事業

通信サロン「誰にも会いたくないカフェ」は、「何をしてもいい場所、何をしなくてもいい場所」としてただ寄り添うことを主として居場所の運営をしている。このスタンスが、若者の継続利用につながると考えるからである。継続できるようになった若者は、次の一步を歩みだしたくなる。この一步を踏み出す時の社会との関わり方により、より深く引きこもってしまうケースも多いようなので丁寧に関わっていきたいと考えている。

就労移行事業所など専門家と相談できる場合は、連携を取りながら支えていくことが役割となる。しかし、そのような専門機関に関わりにくい若者は、一人で悩んで一步が踏み出せなくなりせっかく芽生えた就労意欲がなくなってしまうこともある。一方、面接でうまくいかず落ち込む、また就労まで出来たとしてもそこでうまくいかずより引きこもりサロンにも来なくなるなど失敗例も多いと感じている。

そのため、当法人では一步を踏み出したくなった気持ちに寄り添いながら、①知っている人がいる場所②達成感がわかりやすいもの③エネルギーの上がるものなどの仕事をあくまでも体験として参加してもらう支援を行っている。

当法人が提携する一般社団法人ゆめと月詩舎の事業である放課後児童クラブ・障害児者日中一時支援事業など、実習先として提案している。

利点としては、①知っている職員がいる事②協力してできる仕事である③先生と言われるため自尊感情が向上する等があげられる。この事業に関しては、定着率が高くそのまま就労する人も多い。

また、地域からの単発の仕事依頼として、地域のイベントスタッフ（ゆるキャラ祭り）・映画撮影のお手伝いやエキストラがある。このような仕事の利点は、①単発である②気分が上がるし楽しいなどがあり、引きこもりの状態であるエネルギーが低下しているところからエネルギーをあげられて就労への自信につながると思われる。参加した若者は、「自信がついた」

「楽しかった」など前向きな感想を持つ人が多い。少しの勇気で達成感があり、楽しい経験ができる就労体験は、就労までのステップとしては必要なことであるとする。

(文責 川崎敦子)

若者の声

「初めて映画撮影に関わってみて」

井上 魁英

私は通信サロンの川崎さんからの紹介で、映画の仕事（アルバイト）を2度経験させて頂きました。

何故、映画のアルバイトを選んだのかと言いますと、映画の撮影に関われる事が珍しく感じ、興味が湧いたという理由があります。又、体調（精神面）は優れていないのですが、外に出て人に尽くしている内に、いつか気持ちも晴れて弾みがつき、自然に無理なく仕事がこなせる様になるかもしれないと言う思いも選択の理由にありました。

実際の仕事内容と致しましては2回とも、主に撮影の機器・小道具の運搬と設置の仕事をしておりました。力仕事が多く一日中動き回る為、ある程度の体力が必要に感じます。又、撮影中は一切音を立てては行けない事と、次のシーンの準備中はひたすら動き回るという事から、静と動の差が広く感じられました。

私は映画撮影のアルバイトを通して、一つの作品には様々な役割の方が関わっておられ、全体のチームワークの重要性を非常に感じ、その事が改めて学びになりました。

充実のゆるキャラ祭り

なかま～ず篠原 主任 榎千奈津

今年も無事に開催できたゆるキャラ祭りは大勢の人々で賑わい、大変盛り上がったように見えた。朝早くからお客さんが並び、キャラクターたちとふれあいをしていた。私はゆるキャラ祭りではキャラクターたちの退場や入場をする際の補佐をしていた。キャラクターたちがカーテンを通るときに、体に引っかからないようにカーテンを上げる単純な作業だったが、キャラクターたちの出入りは頻繁だった。カーテンの上げ下げする機会が多く想像以上に大変だったが、もっと大変だったのはキャラクターたちただだろう。キャラクターたちは会場のお客様を楽しませるためにステージに上がるだけではなく、ゆるキャラ祭りのスペースを歩いて写真を撮ることもしている。お客様が楽しむ様子を身近に感じることができた。イベントの裏側で動いていたからこそ見ることもできた景色だと思う。

就労支援（三谷さん）

現在、学童の仕事を始めたばかりのMさんに話を聞いてみた。

①学童の話が来たとき

これまで考えていた職種（製造）と違ううえに、子どもが好きだからやってみようと思った

②見学に行って

子どもの人数とエネルギーに圧倒されたが、体験を重ねるごとに子どもから寄ってきてくれてうれしいし楽しいと感じた。

③週1回の勤務を始めて

正式に就労することが決まるとき、不安や心配が先に立ったが、周囲の人の励ましもあり、最後は背中を押されて思い切って飛び込んだ。まずは週1回をしっかりと働きたい。

現在の学童に勤務し始めて、もうすぐ5か月目に入る。不安はまだあるが、仕事仲間や子どもたちと話せる人や頼まれる仕事が少しずつ増えている。また、毎月の収入も励みになっていると聞く。

これからもMさんのペースで働いていってもらいたい。

自立した若者の支援

食で繋がる地域の居場所である地域循環型未来食堂「みんなの食堂」があることで、生活を支えることができると考えている。

「みんなの食堂」の2階の空き部屋には、家を出て自立した若者が住んでいる。様々ないきさつがあり、家を出ることを決意したM君。当面の目標のアルバイト（当法人関係の仕事）ができるようになり一人暮らしの大まかなお金の流れもできてきたことから、2階の一部屋を住居として提供することで家を出ることを実現することができた。法人としても、火災や防犯面からも住んでもらうことはありがたいことであった。

M君が「みんなの食堂」の2階で住んで2年がたった。この2年はM君にとっても支援する私たちにとっても楽なものではなかった。一人暮らしを始めた当初は、仕事も「みんなの食堂」の人との関わりも順調であった。M君は大学の授業に招かれ「僕には、食事のことや生活のことを心配してくれるたくさんのお母さんがいます。僕は、不登校・ひきこもりなどを経験し周りから見たら運が悪い・不幸に見えりかもしれません。でも、こんなにたくさんの人に支えられている人は世の中にはいないと思います。僕は運がいいと思います」と話した。

しかし、日々の生活を頑張った彼は半年もたたないうちに寝られない次の朝は起きられなという状態になる。とうとう仕事に来ることができず、法人の仕事も解雇をすることになった。家に帰るのか、仕事を見つけるのか、今後の生活をどうしていくか、話し合いをM君と何度もした。M君本人も、アルバイトを探すうまいかず落ち込む日々が続く。支援をする法人内では、役割分担をしながら、生活を支え続けることをしてきた。今年度に入ってからは、外部にも支える人を増やす目的で、支援事業所・相談事業所に繋いでチームで支えることを考えてきた。

そんな中、子ども第3の居場所「みんなの食堂」が開催され、子どもたちが夕方来るようになった。M君も子どもとボランティアで、遊ぶようになった。なぜか子どもには大人気。ゲームを得意とするM君は、子どもたちから尊敬される存在になった。同時進行で支援事業所・相談事業所を通じ、就労支援事業所B型に通うようになったので、子ども第3の居場所でもアルバイトとして雇用。生活が少しずつ安定するとM君の生活も安定してきたように見える。

M君はまだ日々、落ち込んだり頑張ったりしているが、支援する人や場所が増えたことで、以前より一人暮らしの支援も安定してきたように思える。また「みんなの食堂」では、児童養護施設を退所した若者も支えている。食があるから支えられることがある。それが支援の入り口になることを気づかされた。

(文責 川崎敦子)

就労支援は居場所づくり

一般社団法人ゆめと月詩舎 学童部門 園山美恵

一般社団法人ゆめと月詩舎が運営する放課後児童クラブは、令和4年度で3施設（近江八幡市2，多賀町1）となった。前団体から長年にわたって、様々な方々が「学童で働いてみたい」と来られ、子どもたちの安心安全な居場所である「学童」で勤務されている。

就労支援で来られた若者たちも、年単位で確実に勤務を続けている。その中には、各クラブの主任を任される人もいれば、新しいクラブの中核を担う人もいる。そして、また新たに、働き始める職に「学童の支援員」を希望し、週1回から勤務し始めている人もいる。

共に働くなかで「就労支援する人・される人」という立ち位置ではなく、一緒に働く仲間として、自分の得意な事を生かし、相手の得意な事を認め、働いていただくことを意識している。そして困ったことやできないことも悩むのではなく「できません、助けてほしい」と言葉にできる、そしてその言葉を拾ってくれる仲間がいるところが居場所になり、継続した就労支援に繋がっていくと考える。

学童の主任になって

なかま〜ず安土 主任 井上 恵太

2022年4月から、ゆめと月詩舎で正規職員として雇ってもらえることになり、また放課後児童クラブ『なかま〜ず安土』で主任をすることになる。

初めの頃は、主任という肩書きに少し気後れしていたが、普段の保育中の仕事内容は昨年度と然程変わらず、あまり意識することなく自分の仕事をしていたように思う。

昨年度と違うところは、会議にて行事の企画に参加し、打ち合わせや準備、当日の進行を主導する立場になったことである。少し不安はあったが、今までと変わらず自分ができることはやる、他の先生たちがやりたいこと・やってもらえることはおまかせする、分からないことは分かる人に聞くという姿勢で取り組んだところ、そこまで難しいことではないと思えるようになる。立場上、何かしら決定権を委ねられることが増えたが、ひとりで考え込まずに他の先生たちや子どもたちともたくさん話し合っ、みんなが安心できるクラブを作っていきたいと思う。

主任として見た学童

なかま〜ず篠原 主任 榎千奈津

今年度も引き続き、なかま〜ず篠原に所属することになった。今まで違うのは、私がなかま〜ず篠原の主任になったことである。自分で子どもの様子に気づいて動くことをしてきたが、今年度は職員に動いてもらうように意識してきた。放課後児童クラブ（学童保育）は一人一人が個別で動くよりも、職員たちが情報共有して臨機応変に動くことが重要だと実感できた。もちろん職員たち一人一人の考えや、状況に対しての行動が異なるため、それも含めて子どもに対してどういった行動するかも話し合うことが大切だとわかった。

職員たちに指示する立場になったが、根本的には職員同士で協力して子どもたちを支援していく形は変わらないように感じる。時に考えの相違もあり、対応の仕方に差異がでることもあるが、ミーティングなどを怠ることなく、職員との話し合いを重点的にしていきたい。来年度も「職員と協力」「子どもたちの支援」という指標を共有して活動するを目標にする。

働きやすい環境への感謝

西岡佳見

数年学童で働いています。学のない身の上ですが、上司のフォローや、同じく支援員として働いている若者の存在に勇気づけられ、何とか続けていくことができました。

最近感じるのは、学童保育に携わる他支援員の先生方への感謝です。人間関係のいざこざに巻き込まれることもなく、また支援員同士のコミュニケーションが大切なことから、温かい言葉がけにほっとします。おかげで、働くことへのストレスがとても少ないと思います。また、今は同じ職場ではありませんが、同じような境遇の方と趣味の話などができたり、新たな人間関係が生まれ、日々の楽しみもできました。

働く日時についても細かく相談に乗っていただけ、ありがたいです。上司にはとても良くしていただいています。仕事上の連絡やお願い事もしやすいです。

ここで仕事をさせていただくことで、自分への自信や、出来る事の幅、コミュニケーションへの安心、行動力ができたと感じています。



なかま～ず安土



なかま～ず篠原



なかま～ず篠原



なかま～ず多賀

まとめとして

当法人の事業は、引きこもりや生きづらさを感じる若者支援・子どもの居場所・地域の居場所・ヤングケアラー支援など福祉制度の狭間で支援の届かない分野であると認識している。それは、小さい法人だからお引き受けできると考えている。このような分野は、まだまだ法の整備もできていないこともある。また支援の方法も確立できていない。しかし、このような福祉制度の狭間で困っている個人が多くいる。そして、何とか支援していこうとする市町村、ソーシャルワーカーの姿も多く見てきた。私たちの活動は、小さくても意味のあるものであると考えている。私たちが未熟ながらも七転八倒して取り組んできたことが、今後の支援の礎になると信じ、今後も、当法人でしかできない取り組みを行っていききたい。

最後に、事業を進めるにあたり、多くの方々のご支援ご協力を頂いたことを忘れないように、そして今後も連携していきたい。

(文責 川崎敦子)



**令和4年度
若年者（生活困窮・就労困難者）の
地域循環型居場所・就労事業
活動実績報告書**

令和5年3月発行

特定非営利活動法人 芹川の河童
〒522-0083 滋賀県彦根市河原2丁目3番4号
TEL 0749-20-1322

